

# 備陽史探訪

第30号

発行

 備陽史探訪の会  
 福山市西深津町7-2-7  
 印刷所 塩出印刷

## 「会報の体裁を 変えるにあたって」

会長 神谷 和孝

しばらくぶりで会報を手になさって、今までの会報と異なっているのが驚ろかれていますのではないのでしょうか。

一番大きく変った点は、チャンネルとした活字を使用して印刷されているところではないでしょうか。

会報を発行した時点（今から五年前にさかのぼった時点で）、出来るだけ早く、チャンネルとした活字を使用しての会報を皆様にお届けしたいというのが、会の中心メンバーの願望でした。然し、その経費もなく、最初はせいぜい、手書きのガリ版刷り一枚と言う状況からの出発でした。この文章を書くにあたって、今までの会報を取りだして見てみました。最初の方で、スキー特集と言うのが

あり、どのようにしたら上手にすべれるかと言う、たった半ページの内容のものもあり、会の会報とは比較にならない、考えられない、ものでした。

しかし、回数を重ねるごとにページ数も増え、内容も整ってきました。このことは、会報の発行の任にあたった方々が、仕事が終ったから、疲れも忘れて、一回の会報を出すのに何回も何回も編集会議を開き、集まった原稿を分担して手書きをし、それを印刷して皆様に送付すると言う、非常に負担のみ大きくて、表面だけでは評価されない、まさに手作りの苦勞のたまものだと思います。新しい体裁で届けられた会報を手になれて、まず、最初に、その事を考えていただきたいと思います。

会報の編集の任にあたられた方々の、長い期間にわたったの努力があったからこそ、此度のように立派な体裁の会報が生み出されたものと、会長として感謝の念で一杯です。

会員の皆様も、会報の内容が更に充実していくために、自主的な原稿の投稿を心から、御待ちしております。

## 第四回

### 親と子の古墳めぐり

山口 哲晶

今年で四回目になってしまいました。前回は神辺町の中条から福山市加茂町まで、前期古墳から終末期古墳に至る時期の中で古墳の形態にどのような変化が起きて来たかを見て来ました。今年は何どの様にするか、場所はどこにするかと色々悩んだ末にどうにか神辺の御領地区に決める事が出来ました。

当日のコースですが、先ず最初は備後国分寺です。国分寺というのは御存知の様に、奈良時代に聖武天皇が諸国に命じて設置させた寺です。正式名称は金光明天王護国寺と言います。殆んどは平安時代にその存在価値を失って荒廃の一途をたどった様です。この備後の国分寺もその例にもれず幾回かの再建を経て、現在のものは江戸時代のもので、何故ここに備後の国分寺があるのか

考えてみましょう。

次の国分寺裏山古墳群は古墳時代後期の群集墳です。

三番目は迫山古墳群です。この古墳群は一九八三年夏に神辺町教育委員会により迫山一号墳の発掘調査が行われ、多くの貴重な遺物が出土しました。中でも県内では三例目の環頭大刀は重要です。環頭大刀は、畿内政権が政治的・経済的に地方勢力を取り込む過程で授与したものと考えられています。それがこの一号墳から出土したものです。

又、石室の規模も県内に於て有数のもので本古墳のもつ意味は大きなものです。

尚、この古墳は六世紀の後半も末に近い時期の様です。

この古墳群は現在のところ十一基確認されており、前述の一号墳はこの古墳群の盟主的存在です。

次は小山池廃寺です。これは迫山古墳群の西方にあり、現在畑の中から小山池にかけて在ります。国分寺と対の関係にある国分寺尼寺と考えられている様です。

そして最後は藤森古墳群で終ります。今回は、割合短い距離に固ったコースですが中心は迫山古墳群です。発掘風景とか出土品とかをスライド

で見てもらう時間も予定してありますので皆様の御協力、御参加をお願いします。

親子古墳めぐりに  
望むこと

61年度例会実行委

古墳めぐりも今年で四回目になる。

この行事は当会が初めて小学生を対象にして行なったものであるから不慣れなこともあって(何と云っても当時中心会員の多くは独身であったから)多くの不手際や意欲の空転と共に特に印象強いものとして残っている。だから私なんぞは5月になる度に「ああもうあれから〇年たったのか、月日のたつのは早いことよ。ずい分いろいろなことがあったよな。この間に結婚もしたし小供も生まれまし……フムフム」と非常に感慨にふけったりして、古墳めぐりはそれなりに生活上の重要な節目になっているのだが、最近会員の中から「古墳めぐりはマンネリ化している」という声もチラホラ聞こえたりするので、やっぱり私の個人的な懐古趣味だけではこの企画を存続させるにはちと弱いと、もっと将来的な展望も含めて古墳めぐりの意味といったも

のをこの際パシッと云っておかねばなるまい、と一人で興奮しておる次第です。

今、私の手元に第一回目と二回目の古墳めぐりの資料がある。いずれも神辺郷土資料館の佐藤一夫君の手に拠るものである。パラパラめくって見ると仲々おもしろい。まず「古墳って何だろう?」とまるで小供電話相談室の様な語り口で「古ふん」というものが古代の何を私等に語ってくれるのかが書いてあり職業柄仲々手習れた印象を受ける。しかし、「お昼のおべんとう、おいしかったかな? あと少し! 午後もガンバツテ歩こう!」という部分には思わず笑ってしまった。うむ佐藤君もこの古墳めぐりにはずい分期待するところあったんだなあと又々感慨にふけったりする今日の私である。

第一回目の古墳めぐりは駅家・服部周辺の割と大きめの横穴式石室を持つ古墳のみを選んでまわった。

この時にはTV局も来てその晩のニュースで何回か放映された。私らがそのニュースを見たのは丁度『養老の滝』での慰労会が終って外に出ようとするところであった。「あっ〇〇さんが映ってる」「いいなあ」「あそここの所撮ってたんだね」など

と騒ぎつつ表に出て万歳三唱した。テレビに出た位で万歳するなんて全く私らのミスター性を知れようというものだが、百数十人の子供連れの団体を引率してゆくのは想像以上に骨の折れることで、言葉のみでな

いまさしく「全員の協力」が必要であったし、それをある程度やり切ったという満足感が皆に共有のものとなっていたことの表われであったろう。要するに熱気があったのだ。

しかし問題点も多く残った。その最大のもの「古墳めぐり」という企画の面白さの割にその主催者側である私等にそれを担うだけの実力が欠けていることであった。例えば

「横穴式石室を持つ古墳でなければ見ごたえがない」という感想がある。確かに巨大な石材を使用した石室は人を感嘆させる。だが人をウーンとうならせたからといって何がどうしたと言うのだろうか。むしろ私等は何でもない古墳からこそ面白さを引き出さねばならない。「それがホンマもんの芸人というもんじゃない」と何故か大阪漫才の世音になってしまったがこういった反省から出発した古墳部会は今やバリバリと……と言いたいところだが、古墳部会長山口氏の人柄そのままに地味に細々と、しかし

しぶとく月一回の講座を続けている。最近では古墳そのものよりも「古墳時代」「古墳時代の社会」といったものに鋭いアプローチがされている様で、その成果、研究方針がどの様に古墳めぐりに生かされるか、私は大変楽しみにしている。重ねて言うが古墳めぐりがマンネリ化しているとするなら、その責は豊かな材料を使いつつも調理の段階でその味を殺してしまう私等に帰されるべきである。そうでなければ偶然とは言え千数百年も命脈を保ってきたこれら過去の遺跡に対して失礼ではないか! と私は思うのである。(粟田英夫)

新刊紹介

『御調の石造物』(1)

送料共一二五〇円

御調町郷土文化研究会機関誌

『水調』 七号

送料共五〇〇円

御希望の方は左記へ

〒七三二一〇三

御調郡御調町市二四五

御調町教育委員会

## 三月例会 高山城探訪記

末森 清司

高山城跡探訪は好天にめぐまれ予定通り実行出来ました。総勢三十一名の参加者で中世の雄大な山城跡を見学出来ました事は案内にたづさわった私にとって大変喜ばしく楽しい事でした。参加された皆様に深く感謝いたします。特に今度は山頂での現場に立っての説明と議論は会員の皆様の意見のやりとり、そして田口吉田両副会長及び会員各方々の受答え等私にとって大変勉強になり大いに参考となり今後の勉強に役立ちます。高山城登山道は本郷駅側より南すそを登りましたがこの道はけわしく一部すべり易い所が有りましたが皆様はしっかりした足どりであり、お互いに助け合って参りました。南山頂郭からは、本郷町中心の昔の沼田庄の風景と西側にそびえる新高山城として眼下に長々と流れる沼田川を展望しつゝ、中世小早川一族を偲びました。南峰から北峰郭の移行の道は竹木草で道が消えてしまった所をやぶこぎをしながら山歩きのダイゴ味を充分楽しんでもらいました。

北峰の郭からは眼下に真良郷の田園風景そして戦国時代尼子の大軍が高山城攻撃の折の陣を築いたといわれる大陣山小陣山の山並みを展望しつゝこの城の大手道と言われる中世の石垣が残っている山道を真良石丸へと下山しました。見学された通り国史跡でありながら各郭共々荒野のごとく荒果て登山道は草木にうもれ案内板ひとつ設置されていない有様です。しかしそれなりに各郭の遺構はしっかりと残っております。幸いな事にこの城跡は開発の手がのびておらず、廃城後そのまゝ年月を過してありますので発掘調査整備をする事により雄大に中世山城の遺構がはっきりするのではないかと今後への楽しみにしております。

案内役となった私ですが資料不足、勉強不足が多く有り参加された方々に充分説明出来なかつた事が残念です。唯この城跡は一回きりの探訪では雄大さが分りかねます。又この山城での議論のひとつとなりました新高山城への移行についての意見が盛んでしたので再度この城跡を探訪したいと思つてます。計画としては、福山よりバスツアーで高山↓新高山↓三原城跡と小早川氏三つの城跡を見学したいと考えてます。

今度色々の事情で参加出来なかつた方々が多く居られますのでぜひ実現させたいと考えてます。又資料も再度修正し充実させてみたいと今から準備に入つてます。会員の皆様のバックアップを宜しく願ひします。最後に企画に対し色々とお助けて下さいました森田氏、両副会長、会員の皆様の協力心より厚くお礼申し上げます。

### 『鞆に思う』

森 紀子

私が鞆の浦と関わりを持つようになったのは僅か一年半程度前からの事です。一昨年十月の例会で鞆の浦

史跡巡りを担当し、それが縁で次々と史跡巡りを依頼され案内する羽目になったのです。それまでは唯単に鞆の浦が好きという一介の訪問者にすぎなかつたのですが、今ではまるで自分の生まれ育つた町のように深い愛着を感じています。歴史だけではなく、鞆に関わる全般について知るにつけ、現在の鞆町が抱えている問題までも分かるようになってきました。鞆の住民の中には何とかして町を発展させ活性化させたいと熱心

に活動しているボランティア団体があります。

私も二度ばかり講演を依頼され、鞆を観光地としてどう発展させるか私なりに思考していくうち、増々この町と縁が切れなくなりました。

鞆の浦は歴史的に見ても幕末の頃までは、一大歓楽街としてつとに有名でした。瀬戸内海の東西の潮流の丁度分岐点に面している為昔から潮待ち港として繁栄してきました。

しかし明治になって汽船が登場し、潮待ちの必要がなくなり、さらに追討ちをかけるように明治二十四年笠岡・尾道間に鉄道が開通した事で港の機能を尾道に取って代られ次第に衰退していったのです。

以前のような活気がないとはいえず今でもこの町は昔と変わらず風光明媚なすばらしい景色を擁しており、その上二千年の歴史にまつわる史跡も多数あります。文化財もあります。そこで今この鞆の浦が歴史的に見て又観光の町として見直されつつあります。福山市の観光行政の中にも当然この町が組み込まれていて全国的に有名にしようとしています。

鯛網で一部の人々には知られていますが、一般的にはまだ鞆の浦の知名度は低いといえます。やっと最近

の歴史ブームと旅行ブームのお陰で随分遠くからも観光バスが来るようになりまし。年金で優雅に暮らせる豊かな時代を反映してか、史跡巡りを支えているのは、今はどちらかといえは年配の人達が多いようです。ヤング層も旅行が好きですが、史跡巡りよりはアクティブな遊びを好みますので、受入れ体制さえ確立出来ればもっと若い人を集められるでしょう。今後のやり方次第でまだまだ発展の余地がありますし、活性化させる事も可能です。基幹産業の鉄鋼業も生産機能が低下している現在、鞆町も観光地としていづれば様変わりしていくことは必至でしょう。近く歴史民俗資料館が城山において着工されます。行政と住民との間でコンセンサスが得られないなどの問題は多々あるようですが、これが鞆に何らかのプラスになれば幸いです。これから行政側がどのような運営をするか見守っていききたいと思えます。私の史跡巡りの案内も日増しに数が増え、各地から礼状が届くようになりまし。これからも私が必要とされる限り、鞆の浦を紹介する役目が続けたいと思っています。

### 私のすきなものー (お金)

事務局 井上 良三

お金と聞くと、人はすぐ、えげつないものという感覚をもつらしいが(事実、今回妻にもそう指摘され、少々ためらうのだが)、「先立つものは金」という精神の持主である私には、今回、その事をどうしても書くことにする。

わが国における、お金の歴史をたどってみると、常にニセ金づくりと遭遇する。わが国最古の铸造貨幣である和銅開珎が、元明天皇和銅二年二月(西暦七〇八年)に発行されると、すぐに始まった様である。事実私鑄禁止令や、七六〇年には、万年通宝が作られ、旧貨との切換えが行なわれた。逮捕されたニセ金づくり達が銭鑄司(今でいう造幣局)の下で今度は本物の貨幣を作られたという事実もあるからおもしろい。その後、時代は下って、江戸時代になると、徳川幕府が悪貨(良貨にまぜ物をして金の含有率を落したものを)を作る様になると誰がニセ金づくりかわからなくなった。

近代、明治になって最初の紙幣、

「太政官札」にいたっては、今の地方公共団体ともいえる福岡藩で、城中に製造所を作っていたそうだから恐れている。現代のニセ金づくり達はどうかだろうか。この前の紙幣切換の時も確かその前にニセ札事件がありました。確かに現代、印刷機の性能も向上し、本物そっくりのものができるのだが枚数に対するコストを考えると、まあ割の合わないことだから、皆さんやめた方がいいでしょう。

とまあ、「本物、ニセ物紙一重」「バカとハサミは使い様」と思いつつも、この金というものを人間、後生大切にしているんだから不思議な動物ですよえ。

以上、分けのわからぬ事を書いてきましたが、「天下のまわりもの」であるお金を、会計担当の私が、防波堤になって止めて、金を蓄えて、会の運営がスムーズに行く様に努力すると決意しながら、筆を置くことにしよう。

**投稿歓迎!**  
四百字詰二枚前後  
テーマは自由。  
〒七二〇  
福山市川口町三九八一三  
種本 実 まで

### 第四回 親と子の古墳めぐり 募集要項

- 一、日時 五月五日(日曜・祭日)  
午前八時半 駅前釣人 像前集合  
午後四時半 現地解散  
\*当日雨天の場合は五月十一日に変更
- 二、見学場所 深安郡神辺町御領 周辺  
(備後国分寺・国分寺裏山古墳群・迫山古墳群・小山池 廃寺・法幢寺古墳群)
- 三、参加費 親子二人で五百円 (資料代)  
但し、増える場合 大人三百円 追加 小人二百円
- 四、その他 各自昼食持参 山歩きに似合う服装 をお願いします。
- 五、申し込み方法 葉書にて四月二十六日(土)まで必着の事 申し込み問い合せ先 福山市引野町二二三二八 (四一)一二〇四九 山口 哲晶

# 古墳研究部会活動について

山口 哲晶

当研究部会では、中途より古墳研究部会に参加された方にも古墳について、この一冊を見てもらえばある程度までの事は理解してもらえ

る様に」と本年度より、古墳についてのガイドブック作りを基本とした講座を開こうという事を決め、三月十二日に本年度第一回目の古墳講座を開きました。参加者は八名、この日は篠原芳秀氏の担当で、第一項目「古墳とは」という非常に過酷なテーマで開きましたが、これについてむつかしい言葉は極力避け、表現は平易にし、わかりやすくまとめる事に相当苦心された様子がうかがえ、検討の結果「これでいい」という事になり、ここをめでたく第一ページを飾る事が出来ました。ところが、当初予定していた時間よりも短縮されてしまった為に、次項目の「墳丘について」もその後開いてしまいました。この分で行くと一回の講座で二つの項目はできるな」という事になり、次回より二項目づつに変更され、従って次回の講座は山口哲晶

担当で第三・第四項目の「外部施設」と「内部主体」について四月九日(水)に開く予定です。

とてもわかり易いので多数御参加下さい。

## 『城研ニュース』 No. 1

### 城郭研究部会

#### 檜崎城は関所か

中世山城がしばしば関所の役目を果していたことは最近の調査結果から次第に明らかになっていくが、本部会が調査している府中市久佐町の「檜崎城跡」も、その例に含まれる可能性が出てきた。去一月十九日、本部会は第五回目の府中市久佐町中世遺跡実地調査を実施したが、町内の旧道を府中方面に向って歩いて行くと、何と檜崎城跡の北方掘切りに達したのである。附近を詳細に観察すると郭跡らしき平地もあり、ここがかつて街道の関所であったことはほぼ間違いないと思われる。旧道はここより府中方面に抜けているが歩いていくと、各所に石垣で補強した跡が残り、「歴史は足で確かめるもの」という言葉が痛感された調査行であった。

#### 利鎌山城跡の測量調査

本年度は新たに福山市芦田町の中世山城跡「利鎌山城」の実地調査を行なうことになったが、去二月十六日、その一回目の調査を実施した。

この城跡は比高百八十米余の山頂にあり、多数の郭や空堀が残っている。この日はまず城跡の正確な規模をつかむため、平板による測量を行った。午前中は、雪が降ったり、止んだりの空もようでも、風も強く、山上での四時間にわたる作業は部会員にとっても相当きついものであった。しかし、幸いなことに午後は天候も回復し、又、全員の協力によって、城郭主要部の測量はこの一日ではおえることができた。

猶、その後、三月三十日、第二回目の調査を行ない、空堀部の測量を了えることが出来た。成果は山城志に発表する予定である。

#### (今後の予定)

- 四月二〇日(日) 利鎌山城の調査
- 五月二十五日(日) 久佐町の調査
- 六月一日(日) 城郭講座(公開)

#### (問い合わせ先)

山口 美之 方  
電話(〇八四九)五三一六一五七

## 備後の武将(一) 新見能登守元致

山口 美之

毛利家文書に、弘治三年当時、毛利氏に忠誠を誓った、備後の武将十六名の連判状写がある(二二五号)。この時代の備後を知る上で非常に興味深いもので、以下一人づつ紹介してみよう。

#### 新見能登守元致 備後古城記によれば、甲奴郡小堀村の古城主は新見能登守であったという。この人物のことであろう。新見氏は備中北部の有力豪族であるが、その一族がいつ頃備後に移住したかは不明である。

早く、宝徳元年新見備中守父子が潮音寺に小国郷内の地を寄進していることから、それ以前であろう。その後、明応年間新見氏は山名俊豊方として見える。戦国期の活躍は知れないが水野記によると新見元高という者が甲奴郡小堀、福田村の寺社へ土地を寄進している。新見氏に就ては他に所見がなく、これは新見氏の書き誤りであろう。又、帝釈殿修造奉加帳に見える新見少輔六郎元高と同一人物と思われる。猶同氏は小堀を本拠とする国人領主と考えられる。

# シリーズ備後の古墳(1) 石鎚山古墳群

山口 哲晶

本古墳群は、福山市加茂町、通称石鎚山に位置する径二〇m、現存高約三mの円墳(第一号墳)と二〇m後方の尾根上にある径約一六m、現存高二mの円墳(第二号墳)とからなる。

この古墳群は昭和五四年十月から昭和五五年三月にかけて発掘調査が実施された。

第一号墳は古墳裾部と墳丘中腹に列石をめぐる特異な景観をもち内部主体に二基の竪穴式石室を持つ。特に中心主体である第一号主体部には排水溝が附設されている。

副葬品としては、第一主体部からは船載の斜縁二神二獣鏡、勾玉、管玉、刀子、鉞が出土し、又第一主体部にもなうと考えられる定角式鉄鏃十四本が石室掘り方外北側にまつまつて出土している。第二主体部では、銅鏃、鉄剣、鉄鏃等の武器類が主体で、他に琥珀製の勾玉が一点出土している。

列石については、多くは古式古墳に

類例が見られ、又葺石との関連も考えられ今後の研究課題である。副葬品については、第一主体が装身具、農工具のみで戦闘用武器は一切含まないのに対し、二号主体は勾玉一個が出土した他、鉄剣、鉄鏃等戦闘用武器が主体となり、両者の間に特徴的な在り方を示している。

第二号墳は、組み合わせ式木棺(第一主体部)と粘土槨(第二主体部)からなる二基の埋葬主体を持つ。副

葬品は第一主体部から船載の内行花文鏡片、刀子、鉞が出土し、第二主体部には遺物はなかった。特に内行花文鏡片の出土は、鏡片副葬の実例として県内でも類例がないだけに注目される。

時期的には、第一号古墳が四世紀後半を中心とする年代に属し、第二号古墳は四世紀末から五世紀前半と考えられる。(石鎚山古墳群発掘調査報告書より)

## 編集後記

▼「〇〇改革」だの「〇〇見直し論」が当世はやりの中、本会報もリフレッシュされました。

読み終えたご感想はいかがでしょう。会報が発行されてから今回迄の「歴史」を振り返ってみると左記のようになりよく発行されてきたものだと思います。これも会員の皆様の暖いご支援によるものと厚く感謝すると同時に内容の充実へ一層のご協力をお願い致します。

● 会報の発行 81年11月1号

● 毎月発行された時期 83年4月10号

● 隔月発行された時期 84年3月18号

● 年四回、タイプ印刷になる 86年4月

▼毎年のこの時期になるとアレルギー性鼻炎に悩まされる一人です。三月例会の高山城では「なぜ新高山城へ移ったのか?」の論議が盛んでしたがクシャミの連発で充分探訪できず残念でした。花粉なんか悩まされるのも自然から退化した現代人の末期現象かも!?

(種本 実)

## 新入会員紹介

CONFIDENTIAL

備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。